ダンボール戦機WW

マザー母ッカー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ダンボール戦機Ｗのキャラ達が神威大門に入学する話。

無印、Ｗ、ウォーズ全てを知っている方でないと理解が出来ないやも知れません。

目次

第一話　上陸　―――――　1
第二話　レクリエーション　―――　9
第3話　接戦　―――――　17

第一話　上陸

２０５３年、セカンドワールド。
鬱蒼とした森林エリア、デスフォレスト。
セカンドワールドでも最大規模の仮想国家、ロシウス軍が有すその土地は今、一体の〝兵器〟によって火の海に包まれていた。
『クソ！バンデッドの奴ら、こんなもんまで持ってんのかよ！』
ロシウス第１３小隊隊長、ガーディがコックピットの中で吠える。
彼の視線の先ではＬＢＸよりも遥か巨大な兵器、キラードロイド・ドラガンゼイドが暴れる姿と、それに特攻してゆく仲間の姿があった。
ロシウスの汎用機体、ガウンタの機体が二本の巨大な刃に引き裂かれ、胸部のレーダーコアから放たれるレーザーに焼き払われていく。
まさしく地獄の様相、ここが戦場なのだと否応なく理解させられる光景。
そしてガーディに死にゆく勇気はなく、ただ呆然と仲間（ＬＢＸ）が殺（破壊）されるのを眺めていた。
『どうするガーディ！このままじゃ俺らもお陀仏だ！』
『逃げようぜ！勝ち目ねぇよ！』

『ダメだ……！アレを放っておいたらロシウスは終わりだ！ここでなんとかしなきゃなんねぇ！』

とは言うものの、ガーディにはドラガンゼイドを破壊できる未来が見えない。

しかし逃げる事も出来ず、まさしく絶体絶命。

ロシウス軍に配属された事を呪い出した、その瞬間。

『必殺ファンクション！』

そんな声が、どこからか響いた。

そして数瞬を置いてガウンタのセンサーが遠くから放たれた高エネルギー反応を捉え、

『なっ!?』

地震と見紛うほどの揺れとともに地割れがドラガンゼイドの四本の足を巻き込み、バランスを大きく崩させた。

今のは間違いなくアタックファンクション、インパクトカイザーのものだ。

けれど、通常の機体が使うものとは威力が比べ物にならない。

あんなのを放てるのはロシウス……いや、セカンドワールド内でもただ一人だけだ。

『いたのか……！海道ジン！』

頼もしすぎる援軍の登場に、ロシウス軍が湧いた。

けれど、過去何度もキラードロイドと戦った経験のあるジンはわかっている。
あの程度で、ドラガンゼイドが機能を停止するはずがないと。
しかし、アタックファンクションはクールタイムに入りしばらく使えない。
『今だ！バン君！』
『ああ！必殺ファンクション！』
故に、止めは親友に任せる事にした。
《Ａｔｔａｃｋ　Ｆｕｎｃｔｉｏｎ！ＪＥＴストライカー！》
バンと呼ばれた少年のコックピット内に、アタックファンクションの発動を知らせる人工音声が響き渡る。
それと同時にロシウス軍が見たのは、空から飛来する青いＬＢＸだった。
その機体、オーディーンは凄まじい勢いで急降下し、ドラガンゼイドが迎撃しようとレーザーを放射するも捉える事は出来ない。
そして飛行形態のオーディーンの先端が剥き出しのセンター弱点コアに突き刺さり、そのまま貫通する。
溢れたエネルギーは漏洩し、ドラガンゼイドの全身を電流が走り、爆音と衝撃波がデスフォレストの木々を襲った。
その光景をバンは、飛行形態から通常形態に戻ったオーディーンの視点から眺めてい

る。
「ふぅー……やったな、ジン」
「あぁ、バン君のおかげだ」
目的を達したというのに彼の表情に達成感はなく、ドラガンゼイドに無惨に破壊されたＬＢＸの数々を見て、ひたすらに悔しがった。
また、ＬＢＸを戦争の道具にしてしまった事が悲しくて、悔しくて。
（……でも、だからこそ、俺たちで止めるんだ。ＬＢＸを戦争に利用するなんて、絶対に許せない）
バンデッドも、仮想国家も、バンには関係ない。
第二の世界を謳うこのセカンドワールドを破壊する。
あたかも、悪に塗れた世界を壊そうとしたレックスのように。
そんな茨の道を歩み始めたのは、わずか二ヶ月前の事だった。
◆◇◆◇
「――ん！　――さん！　バンさん！」
耳元で響く、ハキハキとした少年の声。
あぁ、もうそんな時間かと、バンはゆっくりと瞼を開いた。
「あっ、おはようございます、バンさん」

「あぁ、おはよう、ヒロ」
上半身を起こすと正面には見慣れた、しかし随分と久し振りな顔がある。
およそ2年前、一緒に世界中を旅した大空ヒロが、あの時と変わらない快活さでバンの前に立っていた。
「とうとう着きましたよ！　早く行きましょう！」
「えっ、もう？」
そう言われれば確かに、地面が揺れる感覚は無くなっている。
どうやらバンは、本当に今の今まで眠ってしまっていたらしい。
横になっていたベッドから急いで降り、バッグと机の上に置いたオーディーンを手に、ヒロと共に部屋から出る。
鼻腔を刺激する塩水の香り、肌に絡み付くような潮風、燦々と降り注ぐ陽光。
港特有のそれらの感覚を味わいながら、バンとヒロは船から降りた。
「バン、おせーぞ？」
「ごめんごめん、昨日、寝るの遅くなっちゃってさ」
そこで待っていたのは、懐かしい面子の数々。
カズ、アミ、ジン、ユウヤ、ラン、アスカの6人。
これまでも何度か集まった事はあったが、ほぼフルメンバーが集合するのはミゼル事

変の時以来である。
「珍しいね～、バンが寝坊するなんて」
「仕方ないよ、２年ぶりにみんなに会えるんだから」
「オレも久々にタケルに会えるからな～。元気にしてっかな～」
各々が表情を綻ばせ、楽しげに会話をしている。
思えば、一年前はずっと張り詰めた状況だった。
自由な時間はあったものの、やはりどこかで焦りもあって……それに比べて今は縛るものは何もない。
だからみんな、年相応な笑顔を見せるのだ。
それにしては、ジンの表情が若干固いのが気になるが。
「話だと私たち専用の案内人がいるらしいけど……見当たらないわね」
「考えられるのは予定が変更したか、案内人が忘れているかのどちらかだろう」
「えーっ!?　じゃ、待ちぼうけってことか？　めんどくせー」
「まぁまぁ、取り敢えず連絡しておくよ」
「その必要はないわ」
バンがカバンからＣＣＭを取り出すと同時、斜め上の方から若い女性の声が響いた。
その場の全員がそちらを、船の甲板の方を向くと、そこにいたのは見慣れた人物。

バーリーウッドの制服に身を包み、チャームポイントであるウェスタン風の帽子を被ったジェシカ・カイオスであった。
「ジェシカ！　どうしてここに？」
「どうしてって、私が案内人だからよ」
「でも、何も言ってなかったじゃないですか。みんなが来るのを楽しみにしてるわって、それだけですよ？」
「そりゃあ、先に言ったら面白くないでしょう？　ちょっとしたサプライズよ」
応答しながらバン達の元へ歩いていくジェシカ。
そんな彼女に更なる疑問を投げたのは、ジンだった。
「……まさか、往復したのか？」
「えぇ、御明察よ」
「……どういうこと？」
「つまり、ジェシカは僕らと一緒に海を渡ってたんだよ。誰にも気付かれずにね」
「はー、手の込んだ事するなー」
と、そのタイミングでジェシカのＣＣＭに着信が入る。
彼女がそれを確認すると、
「どうした？」

「早く来いってお達しね。相当レジェンド達を招きたいらしいわ」
Ａ国副大統領、ガーダインが起こした事件、通称『パラダイス事件』の解決に尽力した９人の少年少女を、世間は敬意を込めてレジェンドと呼んでいる。
ＬＢＸに携わる者なら一度は聞いた事があるレジェンドの面々は、神威大門の上層部でも一目置かれていた。
「じゃあ、改めて言うわ。みんな、神威大門へようこそ！」
ディテクター事件、パラダイス事件、そしてミゼル事変。
集結し、別れた者達がここで再び集まった。
（胸騒ぎがする……何か、嫌な感じの……）
山の上に聳える校舎を見て、バンはふとそう感じる。
上手く言語化出来ないそれを払おうとして、けれど拭いきれないまま、皆と歩き出した。

第二話　レクリエーション

「そういえば、みんなは神威大門についてどこまで知ってる？」
神威大門の教育方針により１９５０年代の街並みを再現している神威島。
レジェンド一向がそんな古びた商店街を抜けて行っていると、ジェシカが誰にでもなくそう問いかけた。
真っ先にそれに答えたのはアミ。
「創立２０５１年で、ＬＢＸのプロプレイヤーを育成するための教育機関、よね」
「はいはいはい！　オレも知ってるぜ！　セカンドワールドがある！」
「ふふ、二人とも正解よ」
セカンドワールド。
神威島の地下に存在する巨大ジオラマの名称で、外壁や建築物に惜しみなく強化ダンボール技術を使用している、いわば第二の世界。
ちなみに、直径は１０キロである。
果たしてどれだけの制作費と維持費がつぎ込まれているのか、アミには想像もできない。

「バンさん」
「ん、どうした？　ヒロ」
「入学式終わったらここに来ませんか？　僕いくつか欲しいのあったんですけど、なんでか買えなくて」
バンが「うん、良いよ」と言葉を返す前に反応したのは、案内人のジェシカ。
「あぁ、それはこの島の通貨がシルバークレジットだからね。シルバークレジットじゃないとものが買えないのよ」
「え……じゃあ僕は今無一文って事ですか!?」
「心配しなくても、貴方達ならすぐ貯められるわ」
「バイトって事ですかー……」
そんな会話をしている内に、神威大門の校門前まで着いた。
が、彼らがいるのは所謂裏口と呼べる場所だ。
他の生徒たちと同じ表口から入れば混乱が生じるだろうという神威大門の配慮である。
「みんな、入学式はどうしたい？　出るのも出ないのも自由だけど」
「私はパース。面倒臭いもん」
「あ、じゃあ僕もパスでお願いします」

「僕は出よう。ユウヤとバン君はどうする？」
「出るよ。入学式なんて初めてだからさ」
「俺は……」
と、どうしようかバンが顎に手を当てて考えようとすると、自らに注がれる視線に気付く。
その主はヒロとランで、彼らが言いたい事は言外に伝わってきた。
すなわち、一緒に来てくれと。
思わず、苦笑に近い笑みが溢(こぼ)れる。
「悪いけどパスにするよ」
「わかった」
横目でチラリと確認すると、ヒロとランは目を輝かせ、喜んでいた。
「んー、バンが行かねーなら俺もそうするぜ。アミはどうするよ？」
「私は出るわ。校長がどんな人か見ておきたいの」
「オレも出よーかな。そっちのが早くタケル達に会えそうだし」
「決まりね。じゃ、出る組は私についてきて。出ない組は日暮(ひぐらし)先生が学校の案内をしてくれるわ」
（日暮先生？）とバン達が疑問に思いながら校舎の中に入ると、一人の人物が壁に体重を

預けてカルテのようなものを覗いていた。
　小さく外に跳ねた茶髪に眠たげな瞳と中々濃い隈、白衣のようなものを着ているため性別の判別が付きにくいが、健康的に膨らんだ胸で女性だと一同は理解する。
　女性はバン達に気付くとカルテをしまい、先頭に立つジェシカの前まで歩み寄った。
「……やぁ、レジェンド達。申し訳ないが、私が君達の案内役に選ばれた日暮真尋(まひろ)だ」
「では先生、案内をお願いします」
「あぁ、仕事はこなす。が、もし君達が何か私に不満を抱いたとしたら、それは私を選出した学校側の責任だ。文句はそっちに言ってくれ」
「は、はぁ」
　と、中々に変わっている真尋にバンはそう返事を返すしかない。
　そしてジェシカを先頭にジン、ユウヤ、アミ、アスカが入学式会場に向かい、その場に残されたバン達は真尋の言葉を待つ。
「あー……じゃあ早速だが、セカンドワールドに行こうか」
◆◇◆◇
「うおぉぉぉぉぉ……！」
「うわー、すっごぉ……」
　目の前に広がる地平線を眺め、そう言葉を漏らすのはヒロとラン。

いくつもの扉と長い通路を経た先に存在する巨大ジオラマ、セカンドワールド。
そこは確かに、第二の世界を謳うだけのリアリティを持っていた。
地面の隆起やポツポツと点在する都市が事細かに再現され、どういう原理か違和感なく発生する海流、そして極め付けに網膜を焼かんばかりに煌々と輝く太陽。
流石に、人はいないようだが。
境界線（フロントライン）がわからないほど、この世界は確かな〝世界〟を構築していた。
「これは……すごいね……」
「あぁ、どーやったらこんなの作れんだよ……？」
予想以上のクオリティに、さしものバンとカズヤも言葉が出ない。
が、日暮は見慣れているため足速に飛空装置の元へ向かう。
「早く乗るんだ。もうすぐ始まるぞ」
「それはどういう――」
バンが問うより早く、凄まじい警報音と無機質なアナウンスがセカンドワールドに轟いた。
『ウォータイム開始まであと２０秒。全プレイヤーは戦闘の開始に備えてください。繰り返します。全プレイヤーは戦闘の開始に備えてください』
戦争が、始まる。

◆◇◆◇

「さて、と」

深い緑の制服が特徴のロンドニア生徒が、勢い良くコックピットに乗り込んだ。

ドンと衝撃が走ると同時、コックピットの蓋が閉まっていき開戦の準備が整っていく。

そして目の前のレールに彼の保有するＬＢＸ、ハカイオー雷牙をセットしてその時を待っていると、カメラに複数人の顔が映った。

『よーし、バン達も見てるらしいから頑張ろーぜ、リーダー！』

「ハッ、元々負ける気なんてねぇ。真正面からぶつかれる機会なんてそうそうねぇからな」

『だからって特攻は勘弁でごわす。ボスがブレイクオーバーすると一気にキツくなるでごわすよ』

「わかってらぁ。ギンジ、指示諸々頼むぜ」

『フヒヒ、任せな郷田クン。ちゃーんと導いてやるよ』

「よし、行くぞぉ！」

郷田ハンゾウの号令を皮切りに、鹿野ギンジが操るクラフトキャリアが発進する。

郷田ハンゾウ、矢沢リコ、亀山テツオ、そしてオペレーター兼メカニックの鹿野ギン

ジで構成されたロンドニア第7小隊、通称郷田隊。
彼らが降り立ったのは、ロシウス連合が所有するアフリカ大陸を模した土地だった。
低い草木とどこまでも開けた大地は魅せる戦いを行うには理想的であり、大門ジョセフィーヌもそれを考えてその場所をチョイスしている。
『へぇ、アラビスタの白牙隊、ハーネスの乾隊、グレンシュテイムの高崎隊がいる。錚々たる顔ぶれだねェ』
「ンなのはどうでもいい。いるよな」
『へへ、もちろん。クルセイドの仙道隊もいるぜ』
今から行われるのは、新入生に向けた一種のレクリエーション。
故にいくつかのルールと明確な勝利条件が設定されている。
勝利条件はエアーズロックを模した一枚岩の上に設置されたエリアを確保すること。
ルール1、今回のゲームは各国に1小隊のみ参加させられ、各国はこれを拒否する権利がある。
ルール2、このゲーム下でのブレイクオーバー、ロストは退学処分とならず、修繕費は全額負担される。
ルール3、罠やスモーク等のアイテムの使用を禁ずる。
ルール4、射線を遮る障害物がない関係上、両手銃、バズーカ、ミサイルといった長

距離武器の使用を禁ずる。
郷田は薄々感じていた……というより、信じていた。
普通のウォータイムでは出来ない、久々の真正面からのバトル。
そんな貴重な機会を、仙道ダイキが無視するはずがないと。
「さぁやろうぜ、仙道ぉ!!」
「ハッ、声は聞こえないが何を言ってるかわかるぜ。そんなに俺と戦いたいなら付き合ってやるよ。一番最初に退場するのはお前だ、郷田」
再度のアナウンスが鳴り響き、各々の小隊が動き出す。
バトルスタート。

第3話　接戦

「凄い、ですね」
「ねー、私もびっくり」
　飛行装置に乗りながら眼下に広がるバトルを見て、ヒロはそんな言葉を漏らし、ランも適当に言葉を返す。
　実のところ、ヒロは甘く見ていた。
　世界大会アルテミスで優勝出来た自分なら、入学してもさほど苦労はしないだろうと。
　だが、そんな予想は呆気なく覆される。覆され続けている。
「君たちが満足しているのなら何よりだ。ルールを考案した甲斐がある」
　新入生たちを、そして何よりレジェンド達を飽きさせず、熱中させるようなレクリエーションを考えろと白羽の矢が立ったのは日暮である。
　これで校長から呼び出される事はないだろうと彼女が思考すると同時に、残りの部隊が2つに減った事を知らせるアナウンスが響く。
「残ってるのは……あっ！　郷田さんと仙道さんですよ！　バンさん！」

「あぁ、実力者揃いだったのに凄いな、二人とも」
「へへっ、どっちが勝つか見ものだぜ」
勝者が所属する国に報酬が与えられるこのレクリエーションも、いよいよ大詰めに入る。
◆◇◆◇
「よぉ、郷田。随分と消耗してるじゃねぇか。苦戦したみたいだなァ?」
「ハッ、こんなもん軽症だ。テメェこそ、あちこちバチバチ鳴ってんぜ」
相対する郷田のハカイオー雷牙と、仙道のイビル・ナイトメアはスピーカー越しに会話をしていた。
時間に制限がなく、スナイパーといった奇襲を受ける要素がないからこそ成立している。なお、示し合わせていたわけではない。
そして、ハカイオーとナイトメアは両者とも相応の負傷を負っていた。
ハカイオーは片目と右肘の関節を失い、ナイトメアもその薄いストライダーフレームのあちこちに浅くない負傷を負っている。
「勝ちは俺が貰う」
瞬間、ナイトメアの姿が掻き消える。
テレポートではない、一切の事前動作なく高速移動を開始しただけだ。

郷田にその姿は捉えられないが、大まかな位置情報はギンジと情報収集機器が教えてくれる。
それで十分だ。
「ラァッ!!」
一切の無駄なく突き出された獣神雷鳴刃がデスサイスを受け止め、僅かな硬直が発生する。
郷田がその隙にナイトメアを掴もうとするも、仙道は極めて冷静にそれを躱す。何回も何十回も、何百回もバトルを繰り返しているのだ。この程度なら読める。
「まだまだァ!」
そして、郷田もこの程度で終わるわけがないと知っている。
間髪入れずに片方しかない獣神雷鳴刃でナイトメアを攻め立て始めた。
柄で、刃で、その身軽さで、ナイトメアは決してダメージを受けない立ち回りでハカイオーの攻撃をいなし続ける。
(クソッ、片腕がないせいで攻めきれねぇ!　必殺ファンクションの【ガオーキャノン】はクール中だしそもそも避けられる!)
数年前、郷田は高速移動するナイトメアを片腕を犠牲にして倒すという荒技で攻略した、しかし今は通じないだろう。

二刀流であればまだなんとかなったかもしれないが、そんなたらればを考える時間すら郷田には惜しい。

上段の突き出しが上にそらされ、そのまま獣神雷鳴刃を振り下ろすも柄を滑って大きな隙を晒す。デスサイスの先端で顎が弾かれ、次いで刃が回転する。それを勢い良く後ろに反って躱すと、顔の下半分が大きく切り裂かれた。

終わりなき攻撃の手が、郷田と仙道に最適解以外を許さない。

両者共に互いのスペックは理解している、だが機体の性能までは分からない。

そんな、傍から見ると酷く簡単そうな、あらかじめ練られているとすら錯覚しそうな応酬は。

「終わりだぜ、郷田」

焦った。焦ってしまった。最適解を先に踏み外してしまったのは、郷田だった。

なんとかして現状を打開しようと僅かに手段を誤った郷田の首に、死神の刃が迫る。

このままハカイオーの首は落ち、郷田の視界は赤く染まる――

「必殺ファンクションッ！　いっけぇぇぇぇぇ！」

《Ａｔｔａｃｋ　Ｆｕｎｃｔｉｏｎ！　グレイスミサイル！》

その直前、ナイトメアに数多のミサイルが殺到した。

勢いの乗っていなかったデスサイスは止まり、仙道が反射的にグレイスミサイルが放

たれた方を見る。
そこにいたのは、矢沢リコが操るクイーンだった。
思考が一瞬だけ止まるが、すぐさまナイトメアの超機動で離脱する。
ミサイルのホーミング機能が追尾しようとするが、全て撹乱されて爆風すら掠りもしない。
（チッ、生きていたのか！）
ナイトメアはその速度を確保するため、ありとあらゆるものを削ぎ落としている。
装甲は勿論、イヴィル・デスサイスも最低限の耐久を残して限界まで軽量化が測られ、さらには情報収集機器を搭載していない。
情報収集機器とは、周囲の環境や他ＬＢＸの反応を自動で収集してくれる優れものだ。各ＬＢＸに搭載された情報収集機器が得た情報をメカニックが解析し、状況判断に用いるといった使い方がされている。
最も有名な情報収集機器はアキレスの鶏冠で、それを真似る者はセカンドワールドでも少なくない。
そして仙道はメカニック以外の隊員を持たず、情報収集機器の恩恵に与れないためリコの奇襲を受けた、というわけだ。
だが、その程度のデメリットなど仙道は百も承知であり、ナイトメアの障害にはなり

得ない。
「フッ、必殺ファンクション！」
《Ａｔｔａｃｋ　Ｆｕｎｃｔｉｏｎ！デスサイズハリケーン！》
ナイトメアが高速回転を始め、黒い竜巻が発生する。
ブロウラーフレームのハカイオーに直撃してもロストには出来ないだろうが、戦闘不能は免れない。
仙道は自身の勝利を確信し、
「――遅いぜ、仙道」
紅い軌跡を置き去りにして、ハカイオーがナイトメアの眼前に躍り出た。
仙道の思考がまたも空白化する。
ハカイオーがこれほどの高機動を持つなどあり得ないのだ、いくら改造したと言えど限度がある。
しかしそれをじっくり考える時間はない。
強引に回転を止めて完成途中の竜巻を霧散させ、デスサイスを下段から滑らせる。
対し獣神雷鳴刃は上段からの袈裟懸け。
死を前にして、一秒がどこまでも引き伸ばされていく二人の視線が映像越しに交差する。

直後、郷田の視界がブレた。
九十度、百八十度と視界が回転し、ナイトメアを見上げる形で止まった。
デスサイスが首を捉え、ハカイオーの刈り取ったのだ。
コアスケルトンからのエネルギー供給が途絶え、郷田のコックピットがブレイクオーバーを示す淡い緑に覆われる。
理論上、ＬＢＸは必要なものを全て胸部のコアスケルトンに収めているため頭部なしでも動く事は可能だが……そもそもダメージ超過だ。
そして、ナイトメアも無事とは程遠い。
肩から入った獣神雷鳴刃が、コアスケルトンを僅かとはいえ傷付けていた。
左腕は当然動かず、剥き出しの部分からエネルギー漏れによるスパークが発生し続けている。遠からず、ブレイクオーバーは免れないだろう。
だが、まだ倒れるわけにはいかない。
まだ、決着はついていないのだ。
「リコ撤退だ！　逃げろ！」
「おっ、おう！」
ギンジの声に引っ張られ、リコがホバー機構で後退を始める。
対し仙道はその場を動かず、画面の端に映るオペレーターの少年とナイトメアの状態

を擦り合わせていく。
「おい、今の俺はどれくらい動ける」
「全力稼働は無理。重心も不安定だし脚部の回線もイカれた」
「チッ、郷田も面倒な事してくれたぜ。サポートしろ」
ブレイクオーバーを目の前にして、どこまでも冷静に勝ちを引き寄せる、それが仙道の戦い方だ。
故に、オペレーターにサポートを求める。
「嫌だよ」
「……あ？」
だが、オペレーターはそれを拒否した。
理由は単純明快、ナイトメアの修理に多大な費用がかかるからだ。
ＬＢＸの修理やメンテナンスは基本的に部隊のメカニックが行う、つまりパーツはメカニックが自費で手に入れる必要がある。
ナイトメアはその特性ゆえバランス補助機や装甲、さらにカメラの機能に至るまで高性能なパーツで構成されている。
つまり、ブレイクオーバーならまだしもロストなんてしたら、たとえ優勝できても収支はマイナスになってしまうのだ。

それに、

「勝利条件は他のＬＢＸを殲滅する事じゃない、あの丘のエリアを確保する事だ。クイーンとの戦闘でブレイクオーバーしてもおかしくないのに、勝利できなかったら僕が大損なんだ」

「……今も損してるだろうが」

「コンコルド効果だね。少し冷静になりなよ、仙道君。郷田には勝ったんだ、これ以上いくら頑張ってもクルセイドの利益が手に入るだけだよ」

「……吊るされた男（ハングドマン）の逆位置。フン」

吊るされた男の逆位置、意味は徒労に終わる。

タロットカードに全幅の信頼を置いている仙道は、それで操縦桿から手を離す。

セカンドワールドに警報が鳴り響き、レクリエーションの終わりを告げた。